Japanese Association for Religious Studies

て民衆と出会っていたところにキリスト教の原点がある。「弱さ」「傷つきやすさ」において解放への同伴者となりうる新たな司祭職理解は、男性司祭主義の克服、家父長的キリスト教克服のための重要な課題であり、これはキリスト教の内部の問題だけではなく、他の宗教や様々な運動体のネットワークに支えられながら取り組まれる課題といえるだろう。

女性聖職者の按手をめぐって
――在日大韓基督教会の事例――

李　恩子

本発表は戦前の在日朝鮮人社会（戦前は朝鮮半島が分断されていなかったため南北の総称として用いる）で唯一設立された基督教宗教団体である現在日大韓基督教会（Korean Christian Church in Japan　以下KCCJと記す）の歴史とその特性を概観し、教団内における女性牧師・女性長老の按手をめぐる時代的制約と女性たちの貢献を検証する。検証する大きな枠組みはエスニシティとジャンダーの交差する視点である。言い換えれば「民族解放」と「女性解放」の緊張関係である。この二つの概念はKCCJの歴史において、同質の重みとして捉え実践されてきたのだろうか？　あるいは相反するものとしてあったのか？　あるいは、相互に拮抗しながらも互いに影響し合っていたのだろうか？　この議論を展開するために、女性牧師・長老按手の案件がいくたびも浮上しては挫折した一九七〇年代の教団内外の「民族」にまつわる人権運動と教団内の女性たちの役割、働きをまず素描する。そして、女性牧師輩出に至らせた背景と要因を探り分析する。具体的な方法としては、当時発刊された、教団女性の機関紙コゲ（峠）の中に現れる教団女性たちの声、つまり、教団女性の活動として、また、一人の女性として教団に、社会に何を求めていたのかを考察し整理するなかで、女性たちの主体回復と教団変革への参加の道を結論として描き出そうとするものである。

パネルの主旨とまとめ

川橋範子・小松加代子

本パネルでは、教団の内部にも場を持つ研究者たちが、宗教研究にジェンダーの視座を導入することにより、女性の宗教的主体の構築とその解釈のあり方を考察する。宗教に信者として参加する女性が多い反面、聖公会の「男性司祭主義」、仏教教団における女性の従属化など、宗教における女性の周辺化は顕著である。現在、女性たちは教団内外で改革を求めさまざまな運動を行っている。宗教活動に従事する者たちの価値体系の形成は、教団内の孤立した環境で行われるのではなく、教団外部を含む多様なネットワークによって影響を受け、変化を遂げる。本パネルは、正統的な宗教の権威から排除されてきた女性の宗教的主体性の問いを再検討し、女性たちが、どのようなネットワークを構築し、どのような規範を受け止め、どのような

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

変革を達成しようとしているのかに注目する。

伝統仏教教団においては、補助的な教化者とされてきた「尼僧」や男性僧侶の配偶者である女性仏教者たちが、教団外部の人権意識やフェミニズム運動とも係わり合いを持ちつつ、教団内でのジェンダー平等運動にかかわり現代仏教の再構築の主体的担い手となっている。しかし、教団の男性中心主義的な権威からの排除は続いている。また、北米の浄土真宗本願寺派には、日系アメリカ人女性が主体となり世代を経て継承されてきた仏教婦人会がある。彼女たちは、かつての見えない存在から認知された存在と転化し教団を支えている、という強い認識がある反面、「女性の会」であることへの疑問も持つ。混在する意見と婦人会のあり方は今後どう変わるのか。

聖公会における「女性の司祭叙任」をめぐっては、男性司祭主義との緊張関係に対抗するだけでなく宗教伝統以外の規範的価値との交流や、それ以外の問題領域をめぐる改革運動のネットワークが機能し、教義の再解釈や制度改革を実現する一方、男性の聖職者や信徒にも少なからぬ意識の変化が生じた。しかし、制度変更後十年以上を経た今、教団全体のジェンダー平等とこのネットワークのつながりは未知数である。さらに、在日韓国教会では、信徒の八〇％は女性であるが、聖職者、長老という教会の役員は男性でなければならなかった背景がある。誰がその権威をきめ、なぜそれは受け入れられてきたのか？　そして八〇年代に女性牧師が認められていくプロセスで、教会外におけるいわゆる民族差別意問題に対する社会運動はどのような影響を持ったのか。これらの事例は、既成教団に異議申し立てをする女性たちが、教団を去るかその中に埋没するかの二者択一的な道を選ばずに、問題提起者、批判者として宗教教団内にとどまるメカニズムを示唆している。

本パネルは、宗教における差別と権力の問題を照らし出すことによって、よりジェンダー平等的な宗教の将来像の構築に具体的な貢献をし、宗教本来の解放性、公共性の回復に何らかの役割を果たそうとするものである。しかしこれは、「ジェンダー」という視座が生み出す問題意識を「ゲットー化」あるいは隔離することではない。宗教が社会問題に向き合う必要性、そのための社会的条件、社会資本としての宗教の可能性を考察することが、「宗教の社会貢献」だとすれば、宗教は抑圧の経験をした人からこそ学ぶものでなければならず、教団は彼らが変革をもたらす活動をすることを歓迎すべきであるといえよう。フェミニスト神学などの活動は、すでにこの領域における貢献を示してきたといえる。そうした活動に目を向けることが、宗教研究の重要な視点でもあり、ジェンダー宗教学が目指すものであると考える。

NII-Electronic Library Service